

セルゲイ・アクサーコフの文学と人 (I)

貝 沼 一 郎

セルゲイ・アクサーコフの回想記にはネクラースフにおけるよりも比較にならぬほど多くの人民の真実の響きがある、もっともアクサーコフはほとんど自然のことしか語っていないのであるが。

ドストエフスキー¹

ロシア文学において全く無比の位置を占めながら西ヨーロッパにはほとんど知られていない大きな力をもった作家は二人のスラブ主義作家のコンスタンチンとイワン・アクサーコフとの父、セルゲイ・チモフエビチ・アクサーコフである。

クロボトキン²

I

地主と農民の生活を如実に描いたもの、すなわち、悪しき地主と哀れな農民の生活をそのまま描いたもの、としてドブロリュポフ (1836—1861) によって農奴制打倒の有力な論拠に用いられた³ 作品を書いたセルゲイ・チモフエビチ・アクサーコフ, Сергей Тимофеевич Аксаков (以下たんにアクサーコフと言う) の作品にドストエフスキーが当時人民詩人として名声高かったネクラースフ, Некрасов, Н. А. (1821—1878) の作品におけるよりも比較にならぬほど多くの《人民の真実》(правда народная) の響きを感じとったことは大きな意味があると私は思う。

ほとんど自然のこと—ロシアの野の河、草と木、魚や鳥たち—しか語らなかった(とドストエフスキーに言われる) 貴族地主のアクサーコフの作品に人民の真実が、しかも非常に多く、あるとすれば、それはアクサーコフの自然についての語り方—自然描写、すなわち、自然の受容の仕方の中に、人民的—農民的なものがあったということになるであろう。これは重ねて言うが、アクサーコフを知る上に極めて重要なことである。

私は本稿でわが国ではほとんど研究されていない(黒田辰男氏の『家族の記録』の繙訳と解説(岩波文庫、昭和26年)の先駆的業績を除けば)、しかもソ連邦でさえも漸く近年その本格的な研究が緒についたばかりの、⁴ この作家を半ば紹介するという形をとりながら、したがって、作家自身の文章を多くとり入れながら、考察してゆきたいと思う(本稿のⅠにおいては作品を、Ⅱにおいてはその人と思想を)。

アクサーコフは1791年9月20日、東部ロシアのバシキール地方の大草原の都市ウファ(Уфа)市に生れた。その家柄は彼自身《モスクワの諸皇帝から賜った先祖伝来の領地》をシムビルスク県(現在のウリヤノフスク市周辺の地方)に持っていたと書いているように(『家族の記録』, 1-73),⁵ ロシアでももっとも古い、由緒ある家系のひとつの貴族であった(V. И. Шенрокは1904年10号の《文部省誌》, Журнал Министерства Народного Просвещения, の『エス・テー・アクサーコフとその家族』, С. Т. Аксаков и его семья, の中でアクサーコフの先祖がノルウィー王ヤクンの甥の高名なヴァリャーグ、シモン・アフリカノビチであると

書いている)。父、チモフェイ・ステパノビチはウファ市の地方裁判所の役人であり、どちらかと言えば気が弱くておとなしい、農村の自然と生活、魚釣りや狩猟の大好きな人であった。母のマリア・ニコラエヴナはウファ地方の副知事の娘で、地方切っ手の美人であり、性格と嗜好も父と反対で、気が強く、賢明で、学問もあり、都会生活を好み農村を嫌った。アクサーコフ家の家系、祖父ステパン・アクサーコフを家長とする一家の生活、父と母との恋愛と結婚、白らの誕生と幼年時代については自伝的三部作の『家族の記録』(1840-1856)と『孫バグロフの幼年時代』(1858)に生き生きと語られている。

1801年10才でカザン中学へ入り、中学が大学に昇格したので、そのままカザン大学生となり1807年卒業する。この時代に彼は文学に眼覚め、演劇に熱中し、学生芝居では自ら監督や主役になったりした。また蝶の採集に熱中し、銃猟の魔力にとりつかれる。これらは彼の生涯の趣味嗜好、いやそれ以上のものとなった。

1807年大学卒業後ペテルブルグへ出て、法律作成委員会の翻訳官となり、1811年モスクワへ移るまでの間に、名優シュシェーリン(Я. Е. Шушерин, 1753-1813)と知己になり、彼の紹介によりペテルブルグの演劇界に入ることとなった。シュシェーリンは若いアクサーコフの演劇熱に至大の影響を与えた。またこの間、当時の文部大臣でありスラブ主義者・文学者だったシシコフ А. С. Шишков (1754-1841)の知遇を得、シシコフのサロンに出席していた。この間の事情は名篇『ヤーコフ・エメリヤーノビチ・シュシェーリンと同時代の著名な演劇人たち』(Яков Емельянович Шушерин и современные ему театральные знаменитости, 1854)と『アレクサンドル・セミョーノビチ・シシコフの思い出』(Воспоминание об Александре Семеновиче Шишкове, 1856)が雄弁に物語っている。

1811年モスクワへ移り、同じくモスクワに移ったシュシェーリンを通じてモスクワの文学者、演劇人と交際するようになった。この頃彼はシュシェーリンのためにソフォクレスの『フィロクテテス』やモリエールの『良人の学校』を翻訳して好評を得た。同じ1811年の夏故郷オレンブルグ県へ帰り、1826年まで15年間をほとんどこの地で過ごし、ときどきペテルブルグとモスクワへ出ては文学、演劇上の友人たちとの交流を保つのであった。1815年ペテルブルグで詩人ジェルジャービン Г. Державин (1743-1816)と知己になり(『ジェルジャービンとの交際』, Знакомство с Державиным, 1852), 1816年にはスヴォーロフ將軍麾下の有名な将官の娘オリガ・セミョーノヴナ・ザプラチナ, Ольга Семеновна Заплатина と結婚し、1817年には長子コンスタンチン Константин Сергеевич Аксаков (1817-1860)が生れた。この期間の最後の数年は領地の経営が旨くゆかず、経済的に苦しくなった。

1826年秋、職を求めてモスクワに出て、当時文部大臣であった旧知のシシコフのあっせんにより検閲官となったが、1832年モスクワの警察を諷刺した小説を検閲許可したかどにより免職となった。1826年モスクワに移って以来、彼は文学者、演劇人と活潑に交際した。この頃の文学界と演劇界の状況は『文学と演劇の思い出』(Литературные и театральные воспоминания, 1856-1858)に詳しく述べられている。

1832年春はじめてゴーゴリ Н. В. Гоголь (1809-1852)と会う。『死せる魂』の作者として尊敬していたゴーゴリとの会見はアクサーコフの一生の事件であった。それ以来の両者の深いながらも曲折を含む友情については両者の交換書翰より成る『私とゴーゴリの交友記』(История моего знакомства с Гоголем, 1855)が興味深く物語ってくれる。

1833年10月コンスタンチン土地測量学校 Константиновское землемерное училище の生徒監となった。彼はこの学校を単科大学(институт)とするべく大いに奮闘し、その甲斐

インスペктор

あって 1835 年土地測量大学 Межевой Институт に昇格するや、初代学長となり、1838 年までこの職にあった。

1837 年父の死後かなり高額な遺産を相続し、これより一家の生計はこの遺産により支えられることになった。

1840 年『家族の記録』(Семейная хроника) 第一章を書き上げる(但し発表は 6 年後)。

1843 年モスクワ郊外(モスクワの北東、57 キロメートル)のアブラムツェボ Абрамцево に広大な地所を買い、別荘を建てる。やがてこのアブラムツェボは当時の文壇、思想界の《サロン》となり、ゴーゴリは自作を朗読し、ツルゲーネフは自作の評価を求めて来訪し、エル・トルストイもしばしばアクサーコフと歓談し、ベリンスキー В. Г. Белинский (1811-1848)、ホミヤコフ А. С. Хомяков (1804-1841) もよく訪ねて来るようになる。

この頃より視力が衰え、作品は口述筆記の段階となる。

1847 年『釣魚雑筆』(Записки об ужении рыбы) を出版し、文名一時に高まった。

1849 年ツルゲーネフと知り合う。この時アクサーコフ 59 才、ツルゲーネフは 30 才を少し越したところで、ツルゲーネフはよくアブラムツェボを訪れ、交友は一生つづき、たくさんの手紙を交換している。

1851 年『オレンブルグ県の銃猟家の記録』(Записки ружейного охотника Оренбургской губернии) が発表され、ここで彼の文学者としての声名は確立した。

1851 年以後 1859 年の死までの 7 年間に、ほとんど失明状態にありながら、大作の自伝的三部作『家族の記録』、『孫バグロフの幼年時代』(Детские годы Багрова-внука) 及び『思い出』(Воспоминания) をはじめ数々の名品を書き、1859 年 4 月 30 日、68 才で死んだ。

アクサーコフの作品は大別してつぎの 5 種類に分けられると思う。

1. 遊獵⁶に関するもの
オホーダ
2. 自伝的三部作
3. 当時の著名な文学者、演劇人その他交友した人々の思い出
4. 演劇批評
5. 民話にもとづいた小品及び詩

本稿では主として 1. 2. 3. を取りあげ鑑賞したいと思う、というのは 4. 5. はそれはそれとして価値あるものの(但し詩は何故か余り良いものではない)アクサーコフの真価が発揮されているのは以上の 3 種類の作品においてであるからである。そしてこれら 1. 2. 3. はひとつの見方からすれば、いずれも自分の人生を語ったもので、大きくまとめるならば自伝的・回想的作品と言えるであろう。

1. 遊獵に関するもの

この部門に属するものはたくさんあるが、いまは以下の 3 篇にとどめる。

1) 『釣魚雑筆』(Записки об ужении рыбы,⁷ 1847)

1847 年標題の『釣魚雑筆』が発表された。それまでアクサーコフは演劇批評家として一応の文名は得ていたし、とくに 1834 年に発表した『ステップの大吹雪』(Буря) は文壇の注目を惹いたのだったが、しかし『釣魚雑筆』が発刊されるに及んで彼の文名が一挙に高まったの

であった。

魚釣りに関しては《ロシヤ語で初めて書かれた》『釣魚雑筆』は作者も全く予想しなかったほどの好評を文壇からも一般読者からも博し、やがて1854年には第2版が、1856年には第3版が出た。

「自分の思い出を新たにするため、つまり自らの満足のために」(《序言》, 4-9) 書かれ、「生来釣り好きの人、釣りの熱愛者たち、すなわち、釣り竿及び釣りという言葉に魔力を感じ、心をときめかせる人たちのために、この記録が楽しいものであり、また多少は有益なものと考えられるので発刊された」(《序言》, 4-9) この内容の見出しも《釣り竿のはじまり》, 《釣り糸》, 《浮子》, 《おもり》, 《鉤》, 《釣り場所の選定について》, 《釣りの技術について》等々という《極めて控えめで、事務的^{はり}一散文的^{はり}》⁸ だった本がどうしてかくも人々の心をとらえたのか。それはこの本がたんなる釣りの指南書ではなくて(釣り技術の本としてもこれはもっとも基礎的な知識を与えてくれるまことに親切な本であるが)、釣りということの持つポエジー、それが行われる場所—ロシヤの自然—の春夏秋冬の美しさ、活き活きした魚の生態などが装飾を離れた、だれにもわかる簡明なことば⁹ で描かれていて、全篇がいわば巧まざる散文詩となっていたからにほかならなかった。

この本の出現が当時の《ロシヤ文学上の一事件》であった有様については、ホミャコフ A. C. Хомяков (1804-1841) とパナーエフ И. И. Панаев (1812-1862) のつぎの文章が雄弁にもの語っている。ホミャコフは言う：

「彼は芸術のことを考えるということにはなかった。彼はそんな考えから全く自由であった。熱烈な釣り人でありながら、人生の偶然事によって(眼が見えなくなって来たこと＝貝沼)これまでして来た娛しみをうばわれた彼は過ぎし年月の、それまでの静かなよろこびを思い出そうとしたのだ。そして最高に人づき合いの良い人であった彼はそれを他の人達へも伝え、説明してあげたいと思ったのだ—そして本ができて上った、著者に文学的名声を与えてくれようとは著者自身も夢想もしなかった本が。そして読者もまた気楽に、芸術的楽しみなどは期待しないで、ただ釣りの技術について何か知りたいものと期待して、この本を手にしたのだ……そしてやがて読んで惹きこまれて行くにつれて、読者は書かれた対象がいよいよ興味深く、思いのままに動く水の流れの気まぐれ、湖や川池の氾濫がいよいよ魅力的となり美しくなってゆき、魚自体が、もっともありきたりのきたのかまつから珍しいローフ(いわな類の大魚、いとうに似たもの＝訳注)にいたるまで、いよいよ愛らしくなってゆくのを不思議な驚きをもって感じたのである。大部分の普通の読者は著者に対し有益な情報を呈供してくれたことに対し、とくに著者の遊猟一般に対する愛情に対し、深い感謝の念を表しただけだったが、しかし、ここには芸術が、しかも真の芸術が、ひそんでいと悟った人々はいた」¹⁰

そしてパナーエフは1854年第2版に当って雑誌《現代人》誌上で、当時のいわゆる文学者たちの文章が余りにも修辭的効果をねらいすぎる傾向を強く批難したのち、つぎのように言う：

「この本は、なかんずく、疑いもない芸術的価値をもっている。この本には数十篇のいわゆる長篇小説、中篇小説及び戯曲と、しかも最近わが国でかなり立派な成功を収めた作品でさえも、躊躇なく取り替えても良いほどの簡明さと真実がある。この厚くもない本(400字詰250枚ほど＝貝沼)の中には数巻の、しかも確かに詩として或る価値をもっているような、いろいろな詩集の中ではとうてい見出せないほどの詩がある。この本は、もしかしたら、専門家、釣り師にとっては、むしろ芸術家—文学者^{ポエジー}に対してもっているほどの意義はもっていないのかもしれない。『釣魚雑筆』と『オレンブルグ県の銃猟家の記録』のこの2冊の本においてアク

サーコフは、現代作家のうちただ『獵人日記』の作者のみがもつ叙述の簡明さと深い詩的感覚に到達した。しかも後者に対する失礼をも顧みず言えば、『釣魚雑筆』と『銃獵家の記録』の中で自然はいっそう深く感じとられており、いっそう簡明に伝えられている。アクサーコフの状況には人工的なものの影さえなく、文学的修正は微塵もない。アクサーコフにおいて自然はその荘大な簡明さとその香わしい水々しさを余すところなく現した」¹¹

以上のことばは『釣魚雑筆』の本質を余すところなく表わしたもので私からは何も言うことはない。ただではこの本の内容はどんなものなのか—このことを『雑筆』自身の文章から語らせて頂きたいのである。(訳文は原文の《泉のように澄んだ》¹² 文体をばはとうてい移し得ずまことに忸怩たるものがある)：

「ふな。これはもっとも多産性でどこにでもたくさんいる魚である。体形は幅広くて、丸みを帯びている。その形は草魚クラスノビヨールカとレーシチ(形が円盤状のこい科の一種=訳注)の中間で草魚より幅広く、レーシチよりは狭い。鱗は銀色または金色である。白ぶなも黄ぶなも(無雑作に釣り師はかく呼ぶ)同じ水域に住んでいることがある。小さな堀り池には中間色の、白色から黄色へ移る、まるでバラ色のようなのがたくさんいることがあるが、これは恐らく雑種であろう。この二種の違いといえば、ただ黄ぶなはややまるみが厚く、ひれ、とくに下ひれが赤色であるのに、白ぶなはそれが灰色がかった暗青色であることである。……ふなの食いはまことにもって一様でない。あるときはひっきりなしに食い、しかも甚だ確実であって、動いた浮子はそのまわりにひとつまたはいくつかの輪をえがき、横へ動いてゆくが、水中に沈むことはめったにない。この場合は竿をとって合せるにはだいぶ間がある。……」(《ふな》より、4-106, 109)。

「……この両方の場合ヤーズィ(こい科の一種=訳注)釣りにもっとも貴重な時刻は疑いもなく早朝である。この時刻には日の出のずっと前から食いはじめる。だから朝焼けの空に向いながら前に身をかがめて座っているだけで、浮子を見わけることができる。そしてこの早朝の釣りの醍醐味を十二分に味わうことのできるのはただ真の釣り人だけである……荘厳な静寂の中で東方が白み、南西の方へ夜の闇を追いはらってゆく。物の形は闇の中から浮び上り、はっきりして来る。しかし葦はまだそよともせず、水面には軽い蒸気がけぶってもいない、まだ日の出には間があるのだ……と突然、水底から湧き上ってくる水泡のぶくぶくという音が初めは遠くから聞えて来る。これは大きな魚の鼻から吐き出される空気なのである……これはヤーズィが泳いでいる確かなしるしである……水泡はだんだんと近くにとび出して来て、もう泡が見える……さあ食いがはじまるのだ……」(《ヤーズィ》より、4-92)。

「しかし以上の理由のほか小舟での真昼の釣りは少くとも私にとっては、一種まったく特別の素晴らしさをもっている。多くの人にはこれは理解しがたいものに思えるであろう。夏の真昼の太陽の焼けつくような光線が水の反射のために二倍の力で照りつけるを堪え難くさえ感じる人も多い。しかし私はいつもわが国の短い夏の暑さが好きであつたし、いまでも好きである……燃えるような炎熱の直昼。もの音ひとつしない静けさ。一面に草が生えてまるで春の草地のようにみどり色の広い川池はそよともせず、なだらかな岸に囲まれてまるで眠っているように見える。葦もじっと動かない。川床と草のないみおは鏡のように輝き、残りの水域はびっしりとさまざまな水草が生えていて、その葉があるところは鮮やかなみどり色に、あるところは黒ずんだ色となって水面にひろがっている、しかしその根は深く藻の川底に張っているのだ。民間では水差しと呼ばれる白や黄色の睡蓮の花、黒ずんだ色の草のぎざぎざのある長い葉の上から突き出ている赤い小さな花—これらは池の面に敷きつめられたみどりの絨氈にいちだんと色どりを添えている。暑さのもつなんという豊かさ！ なんという肉体的悦楽そして恵みであろうか！」(《釣りの技術について》、4-57)。

「かわめんたいはいつも夜だけ進み、昼はけっしてモルダ礫(柳の枝で編んだまるい袋状の礫=訳注)に落ちることはない。わが国の長い、きびしい冬に、ときに数日も荒れ狂った吹雪のあと、別してオレンブルグの大草原吹雪に吹きまわられてでこぼこになった野原が狂瀾怒濤の最中に突然そのまま固ってしまった海の様相を呈しているとき、燦々たる太陽の光りを浴びながら雪に埋もれた小路づたいに

同じく雪に埋まった築の垣へとたどり着き、ときには吹き溜りの下で直ぐには見つからないので、ショベルで雪をかきわけ、金でこや斧で氷を割り、氷を浅いたも網またはショベルで掬っては投げ上げ、さてときには半分までもかわめんたいが入っているモルダ築を引き揚げるのはじつに愉快で楽しいものだ」(《かわめんたい》より、4-135)。

この描写のなんとすばらしいことだろう。猛吹雪のやんだあとの、うって変った燦々たる太陽の下の白一色の大草原。その光りを全身に浴びながら築に近ずいてゆく漁人の姿。そして雪を掘って引き上げた築に半分まで入っているたくさんのピチピチしたかわめんたいの姿、それを見たときの喜び。これらが読む者の心に伝わって来る。私には清少納言の『枕草子』の一節が思われてくるのである。

ここで名著の名の高いアイザック・ウォルトンの『釣魚大全』(森秀人訳、角川書店、昭49)とアクサーコフの『釣魚雑筆』を較べてみるのも一興であろう。1653年に発刊された『大全』においてウォルトンは釣りの楽しさ、美しさを述べるに当って、釣りの技術、道具、餌、魚の習性、個々の魚の特性とその釣り方、料理法等々を詳細に示すと同時におびたしいキリスト教神学的、哲学的考察(但しユーモアに満ちた)と処世上の教訓をちりばめ、数多くの詩を引用しなどして(女性もしばしば登場して発言する)、全体として機智溢れる楽しい読みものを創り上げたのであるが、文学作品として見るときは、事物の描写がアクサーコフよりは格段に少い。アクサーコフは量的には前者の半分にも満たないほどの《厚くもない本》のなかで、哲学的考察や教訓をほとんど述べることなく、ひたすら魚とそれの住む水と周囲の自然を描写したのである。しかし彼は天性の詩人であったので、出来上ったものがたぐい稀な美しい文学作品となったのであった。

ウォルトンは魚のことは何もかも知りつくした達人として釣りに処しているのに対し、アクサーコフはあくまでも探求者として釣りに向っている。

2) 『オレンブルグ県の銃猟家の記録』(Записки ружейного охотника Оренбургской губернии, 1851)

熱心な釣り人であったアクサーコフは更にそれ以上に銃猟家でもあった。『釣魚雑筆』の思いがけない好評にはげまされたアクサーコフは、ゴーゴリの熱心なすすめもあって、一段と力をこめて今度は銃猟家としてロシアの鳥たちの姿と自然を描いた。

『銃猟家の記録』は『釣魚雑筆』を越す賞賛をもって迎えられた。『獵人日記』の作者ツルゲーネフは「私はロシア文学とわが読者諸君に対しこの『記録』が世に出たことについて祝意を表する。このような本の出ることはわが国では余りにも稀である。エス・テ・アクサーコフの新しい文章にまだ接しない人は、それがどれほど興味深く、その紙面からどのように魅惑的で新鮮な息吹きを感じられるかを想像することはできまい」、「これは真のロシアのことばである。善良で率直で、しなやかで軽妙なロシアのことばである。けばけばしいもの、余分なものはなにもなく、気張ったところや萎びたところもいっさいなく一表現の自由さと精確さともすばらしい。この本は情熱をこめて書かれたものであり、情熱をこめて読まれるものである」¹³と絶賛したのも、ホミヤコフが「比較的範囲の狭い釣り人の回想記に代って獵人の回想記が登場した。この中でロシアの自然は絶妙の美しさで繰り広げられた。そしてロシア語の文章は、すでにプーシキンとゴーゴリが出たあととは言え、一歩前進した。セルゲイ・チモフエービチ・[アクサーコフ]の栄光はかたまり、永久に確立した」¹⁴と言っているのもけって過褒ではない。

例により原文(の翻譯)を2, 3紹介する:

「とうとう全くの雪解けがやって来た。温かい南西の風が雨をいっぱい含んだ雪をどんどん食いつく

してゆく。地面の多くは、とくに高いところは、真昼の太陽に温められて、雪がとけてしまった。風景は一変した。こんどは野原一面の黒土の上にはそこここにもう残雪の白い点や縞が見えてくるし、かたく踏み固められた冬の道が一本、うす黒い堆肥をその上にのせて、櫛の歯形にのびているだけだ。谷間は水のために青色となり、ふくれ上り、奔流となって走り出す。その水で川は満水となり、川池の水をもち上げ、岸から溢れ出て低地へ流れひろがってゆく。春の氾濫が始ったのである。水蒸気が地上からあがり、地面は、農民たちの言葉によれば、退^{さが}ってゆく。空は灰色で、空気は湿っぽく、霧たちこめる。そしてまさにかかるほの暗い毎日毎日に、夜中、朝やけ、夕やけの時ばかりか、一日じゆう、あらゆる場所に鳥がいっせいに渡ってゆき、また飛んで来るのである。がんや白鳥が、それも多くの場合、ひとつがいずつ姿を見せて、高い灰色の雲の中を飛んで行ってはいたのが、いまや彼らは巨大な列をなして飛んで来るのである。つるはやや遅く、まるで戦闘隊形をとった船団のように両辺を上げた鈍角三角形をなして、大空を渡って来てその姿を見せる」《野鳥の通過と飛来》より、4-170)。

「春のやまどり獺は成績もよくなくまた容易ではない。太陽の光りが少しずつ温くなり、雪の表面が陽の光りがしみ通るために、全然眼では気がつかないほどに、真昼に少しとけはじめるようになると、雪の表面に薄い、ダイヤモンドの火のように輝く皮殻ができる、これは雪曇^{サースト}と呼ばれている。こういう雪曇の上を歩いて春三月に、ときには四月のはじめに、樹にとまって雌を呼んで啼く雄やまどりやその声を聞いている雌やまどりに忍び寄ることができる。忍び寄るには別な木のかげから最大の慎重さをもって、いっさい物音をたてず、目指すやまどりの頭がつねに木の枝または木株に隠れてしまうような具合に近寄ってゆかねばならない。雄やまどりが雌を呼んで啼いているときは、より大胆に近寄ってもよいが、啼くの止めるや否や、立ち止まらねばならない、また進むにしても、木株の太さが獺人の姿を完全に隠す場合だけである。雌を呼んで啼いているとき、雄やまどりは熱中の余り何も聞えず、何も見えはしない、が疲労または何か不意に驚いて啼くの止めるや否や聴覚と視力はただちに回復するのである。この場合は犬は要らない、しかし遠くまでとどき、集中的にしかも強力な発射力のある銃が要る。この季節にはやまどりは秋の終りや冬の初めほどには、銃に対して強くはない、とはいえ代りに射つのはほとんどつねに遠くから、しかもしばしば木の小枝や大枝の隙間から、ねらわなければならないのである」(《やまどり》より、4-399)。

「小丘^{湿原}はつねに地下泉によって支えられており、たまにはさるやなぎの灌木が生えていたりして、いつも土壌が水気を含んでいるので、とうてい豊富な草刈場ではない、というのは沼澤草本が多くまた水気が多すぎて、普通の草地の草の生育がさまたげられるからである。どこにもうまのあしがた草、ローマかみつれ草やオランダげんげ草が他の草より多いのが見られる。やわらかい地表は人の足に凹みはしても、足の下に深く沈むことはなく、すぐに堅い地床が感じられる。このような沼地を歩くのはぬかりもせず、はまりもせずまた重くもない。これは銃獺にとってもっとも広い、条件の良い沼地である。そしてこれには流^れて^いる、穴にた^まっ^てい^るのではない、泉流が横切っていることもまれではない。

どろりとした泥や赤さび色の泥地と溜り泉水のあるぬ^かる^み沼地はもう全く別の性格をもっている。ここには草地草本はなく、湿地植物まで少い。ところどころにどろどろの泥の丸い斑点や長い縞^{カサ}があり、かなり大きな、ときには赤味がかった、水溜りが見える。この最後の場合は沼地は錆びた沼地または単に錆び地と呼ばれる。水と泥の赤味がかった色は鉄鉱石のたしかな存在を示している。小丘があることは少く、泥地や赤錆び地にはほとんど草も生えない、代りにそのまわりはしばしば小さな葎やすぎなや異常に丈の高いすが密生してとり囲んでいる。赤錆びた水溜りの表面には薄い膜がはって、それが陽の光りをうけると鉄のような青味がかった色に輝く。水ぐもはその上を前後に長い、弓形の足で走るのが好きだ」(《沼地》より、4-180)。

この文章を読むとき、私には沼地を歩くアクサーコフの姿が見えてくる、彼は何を思いつつ歩いていたのだろう。

3) 『蝶の採集』(Собира́ние бабочек, 1858)

アクサーコフの遊猟ものの三部作といえ、前述の二作と『遊猟家のいろいろな遊猟についての物語と思い出』(Рассказы и воспоминания охотника о разных охотах, 1855)を挙げるのがふつうである。この『物語と思い出』は『釣魚雑筆』、『オレンブルグ県の銃猟家の記録』に言及しなかった魚釣り、銃猟のエピソードやさまざまな方法による魚や鳥の捕り方などの記録であって、いわば前二作の補遺の形となっている極めて興味深い作品であるが、しかし私は紙数の関係上これは割愛するとしても、カザン大学の卒業生有志の依頼によって死の前年に書かれた標題の『蝶の採集』については一言せざるを得ない。

この作品は副題に《学生生活の物語》(Рассказ из студенческой жизни)とあるように、アクサーコフのカザン大学時代の思い出一蝶採集に熱中する経緯を中心に、それをめぐる友人達や教授達との交際、故郷への帰省の旅の出来事などの一を綴ったものであるが、67才でしかも病苦とたたかっていた人の筆とはとうてい思えない若々しい感覚と色彩と力に満ちたものであって、小篇(中篇)ながら彼の傑作中に数えられるものと思う。原文の一部分を翻訳して紹介するが、つぎのアンチオパという珍しい蝶を捕えたときの有名な観察記録は《視覚的写実主義者》⁵¹といわれる彼の一面を遺憾なく発揮したものであろう：

「私はこの蝶をすぐにそれとわかった。それはすでにチミヤンスキーのコレクションの中にあつたものであり、ブルメンバッハの本によって精確に定義されており、フックス教授がこれを確認したものであった。それはアンチオパと名づけられるものであった。しかしブルメンバッハのこの蝶の記述はなんと気の毒なものであろう：《アンチオパ、すなわち、ニムファ蝶、は縞が多くあり、翼はとがっており、黒色でそのはじは白っぽい色をしている》。ただこれだけなのである。いったいこんな記述からどんな概念が得られようか？しかもこの蝶には縞などひとつもないのである。さてアンチオパはそのつつましやかな色彩にもかかわらず、その大きさだけで素晴らしいロシヤ蝶の数の中に入るものである。暗い珈琲色の、びかびかした、漆のように光沢のある翼は豊富な色粉により天鵝絨のように見え、腹、すなわち、胴体の近くではまるで苔か薄赤黄色の極細の毛で蔽われているかのようなのである。翼の端は、上翼も下翼も、淡黄色、クリーム色の花綱模様^{フエストン}に切りとられた、かなり幅広い歯型の縁でふちどられている。これと同じ色の二条の短い細い縞が上翼の上端にあり、淡黄色の縁に沿って、両翼に、鮮やかな青色の斑点が散らばっている。アンチオパの目と鉤矛型の触角は他の蝶に較べて甚だ大きい。全身暗色の羽毛で蔽われている。翼の裏側はとくに目だつものもなく、暗色の下地に白い細い翅脈が縦横に走っている。私は私たちがアンチオパを手に入れることができたのに大いに満足した」(2-176)。

この文章について E. Cohen 氏が《生は短く芸術は長い—このことは人間の一生と同じく、蝶の一生にもあてはまる、それが描写の芸術によって不朽のものとなる時は》¹⁶と書いているのも真実と思われる。この文章を読み人はまた志賀直哉の『城の崎にて』を思い起すかもしれない。大病の後の35才の志賀が描く死んだ蜂、生きんともがく鼠、作者の投じた石で偶然死ぬことになったいもり等の姿のさびしい静かさとそれにうながされて起る東洋的の死の想念、それと67才の老病加うるにほとんど失明状態のアクサーコフが描くアンチオパ蝶の華麗さとそれを得た喜びの強さ、そして『蝶の採集』全篇にみなぎる精神の若々しさとは(たとい本篇が青年時代の思い出を書いたものとは言え)著しい対照をなすものと言えよう。アクサーコフは死ぬまで《若かった》のである、このことについては後に更に触れることにする。

また大学の暑中休暇で故郷のスターロエ・アクサーコボ村へ帰る途中に遭遇した雷雨の状況と雷雨に伴う降雹によって収穫を全滅させられ悲歎に暮れる農民の姿を描いたつぎの文章は読む者の心を深く打つことであらう：

「私たちがカザンの町を出て モークラヤという 長い町はずれの村を通り過ぎたときはもう熱くはなく、壮麗な夏の夕べが灼熱の大地に涼風を送っていた。日照りがつづいてもう長いこと雨がなかった。……すぐにはなかったがいつの間にか私は睡りにおちていた。しかし代りに私はもうぐっすり寝こんでしまって、宿駅で馬を換えるのも知らず、朝の9時頃、雷鳴の音で眼をさました。気がついてあたりを見廻すと頭上に小さな雷雨の雲がまっすぐに雨雲の方へ勢いよく走っていた。そして雨雲は青色になり、黒くなり、一分ごとに大きくなり、早くも右側から天空を蔽ってしまった。そしてその一方の端が白ちゃけて見えた。そこにはもう大雨が大地を切りきざんでいて、にぶい、なんだか気味の悪い音と新鮮な湿り気が送られて来ていた。《どうやら雹らしい、一とエフセイチは言った。一神様、憐れんでください！百姓から最後のパンまで取り上げてしまいます》。一雨雲は私たちのわきを進んでいる様子だったが、とつぜん向きを変えて、まっすぐに私たち目がけて来はじめた。大粒の雨が埃の道とむしろをかけた、同じように埃っぽい私の幌馬車を打ちはじめた。まもなく雨雲は私たちをすっかり蔽ってしまった。目もくらむ稲妻が蛇のように光り、つづいて時もおかず耳を聳する雷鳴がとどろき渡った。雷鳴のたびごとと雷が私たちの馬車のそばに落ちたかと思われた。はじめはエフセイチ、イワン・マルインと馭者は帽子をとって、稲妻が光るたびに十字を切っていたが、稲妻がほとんど絶え間なく光るに及んで、十字を切るのを止めてしまった。……とつぜん大雨風がやって来て大粒の雹がはげしく降り、雨が土砂降りとなった。そして空気は白い雨の粉に変わってしまった。……雨雲は南から西へ移った。そして青空が早くも右側から光りはじめた。私とエフセイチは何事もなかったが、イワン・マルインと馭者はずぶ濡れであった。しかし強い夏の太陽はもう雨雲のなくなった空へ出ようと急いでいて、濡れた馭者とマルインを乾かしにとりかかった。二人は陽気に相手の様子を笑い合っていた。雨雲は中心が私たちの頭上を通り過ぎたかに思われた。そして^{だく}進んでゆくと、其処は雨も雹もずっと強く、落雷はより近く、より破壊的であったことを知った。水たまりが道にできていて、草刈の終わった草地は春のように水に漬かっていた。大粒の雹があちこちでまだ消えていなくて、とくにくぼ地というくぼ地には白い縞をなしてたまっていた。私たちは麦畑のそばを通り過ぎたが、畑は多かれ少かれみな雹に打たれ、数ヘクタールはさんざんに突きくだかれて、まるでその上に小さな家畜の群が長く放牧された後のようであった。穂だけではなく茎までも泥の中に踏み入れられたように見えた。そればかりか或る近くの村には疑いもなく落雷による火事のしるしである二本の煙が立ちのぼっており、近くの森には落雷によって裂かれて焼かれた数本の木が煙りをあげていた。素早く過ぎ去った雷雨のこの恐ろしい爪あとは晴れた空、新鮮になった空気の静寂と赫々たる太陽の光り輝く下では、とくに心にしみ入るものであった。《ほれ、本当の雷雨があったところはあそこです、一とエフセイチは言った。一わたちは雨雲がちよっと翼でさわっただけのようだ》。雹でさんざんに打たれた数ヘクタールの麦畑は私の同行者たちに特別の同情心をおこさせた。馭者自身が私たちの行くその村の出身だったので、その数ヘクタールが誰々の畑であるかまで知っていた。そしておりもおりその持主は貧しい人たちで、このような損害は彼らを徹底的に打ちのめすものであった。しばらく三人はこの悲しい事件について話し合っていたが、エフセイチ小父さんの言葉には直底からの本当の心の善さが聞えた。《ああ、神様！、一と彼は言った、一もしわしが金持なら、すぐにもお金を出してやるのだが。そうでないとうなるだろう。損害は何百、何千ルーブルなのだ、とてもカペイカ（1ルーブルは100カペイカ＝訳者）では助けようにも助けられない》。私達はまもなく宿駅に到着した、そしてその麦畑の悲しい報せを告げた。誰もこのような災難を思ってもいなかった、というのはこの村には雹など降らず、ただ雷の音を聞いただけであったのだ。老婆たちや女房たちの間には唸き声と泣き声が上った。数人の人は自分の眼で自分の不幸を確かめようと直ちに畑へ向った。エフセイチは後で、自分は自分の持っていた小銭をいちばん貧乏な家族へ恵んでやったと打明けた」(2-202~205)。

繰り返すがこれは死の前年、67才のアクサーコフによって書かれたものである。降雹に打ちのめされた農民の姿が死に到るまで彼の脳裏から去らなかったのであろう。¹⁷ ドストエフスキーが《人民の真実》のひびきを聞いたのもこのようなアクサーコフの中に於いてではなかろうか。

2. 自伝的三部作

ドストエフスキーは《彼（アクサーコフ）はほとんど自然しか書かなかった》と言っているが、アクサーコフが書いたのは自然だけではなかった。彼は自伝的三部作『家族の記録』、『孫バグロフの幼年時代』及び『思い出』において祖父、祖母及び両親の人となり、両親の結婚、それをめぐっての家庭内の葛藤軋轢、自らの誕生、祖父の従妹の悲劇的な結婚及び中学・大学時代の諸事件を経糸として、それに十八世紀後半と十九世紀初頭の東部ロシアの地方中流貴族の人間と生活とそれを取りまく自然の記述と描写を緯糸として、重厚で肌理こまかくまた美しい色彩の、荘麗ともいふべき一大人生模様を織り上げたのであった。この三部作、とくに前二者によって、彼は写実主義者としての自己を示したのである。（ロシア・ソ連の文学界では彼をゴーゴリの弟子と見做す傾向がある、¹⁸が私は必ずしもこれに賛成するものではない、ゴーゴリの影響は認められるとしても）。

いまこの三部作について少しく考察してみよう。

1) 『家族の記録』（Семейная хроника, 1840-1856）

この小説は5章より成り、その各1章が断続的に書かれ、全章が書き上げられるまでには15年を要した（オトルイボク第一章は1840年に書かれたが発表は6年後であった）。

これはステパン・ミハイロビチ・バグロフという名に託されたアクサーコフの祖父が《モスクワの諸皇帝より先祖に賜ったシムビルスク県での先祖伝来の領地が生活のためには狭くなったため》（1-73）ウファ県のブグルスラン郡に広大な土地を買い求め、そこへ農奴たる農民、下男・下女を全部引きつれて移住し、新しい生活を始めてから（新移住地は新バグロボ村と名づけられた）孫のセルゲイ（アクサーコフのこと）が生れるまでのバグロフ一家の諸事件をその発生の順序にもの語った小説である。無味乾燥に思われる《記録》という題にもかかわらず、これは新移住地でのステパン・バグロフの生活ぶり（この辺の筆致にゴーゴリの影響が伺われる）、ミハイル・クロレソフという不思議な性格の人物とステパン・バグロフの従妹のプラスコビヤ・イワノウナ・バグロフの結婚とその悲劇的な破綻、田舎育ちの善良で気が弱く余り教養もない息子アレクセイ（アクサーコフの父）と都会ウファー市育ちの高官の娘で、利口で教養があり、気が強くしかも処生にもたけた美しい女性のソフィヤ・ニコラエウナ・ズビナ（アクサーコフの母）との恋愛と家族全員の反対の中での結婚、姑、小姑たちの意地悪な鋭い眼の中での新夫婦の生活と最後に祖父ステパン・バグロフが待ちに待った男の子の孫—バグロフ家の跡取り—セルゲイ（アクサーコフのこと）の誕生までの物語であって、波乱曲折に富み、ときには息をもつかせぬ事件の進行（クロレソフ事件、夫クロレソフによって幽閉された従妹のプラスコビヤの救出にかけつけるステパン・バグロフの場面等々）のある読みものとしても極めて面白い小説である。しかもその叙述は清明と同時に精彩に富み、アクサーコフ一流の《眼》を以て状景を活写しており、恰も人物が眼前に動いているかの如き感を与える。スラブ主義者たちはこの作品を以て、アクサーコフを第二のシェークスピア、否それどころかホーマとまで激賞したほどであった。

ここに描かれた人物はそれぞれに特徴があり、具体性に満ちているが、主要人物たる祖父ステパン・バグロフの人物像はとくに傑出しており、これはどの文学史も認めているところである。¹⁹

祖父バグロフは《中脊というだけでなく、むしろ小男であったが胸は盛り上って高く、肩は並はずれて広く、両手は節くれ立っていて、石のようで、筋肉質の身体は彼が力持ちであるこ

とを表わしていた。血気さかんな若い頃は、若者たちのなぐさみで、彼に向ってひとかたまりになって軍人が飛びかかってくるのを、がっしりした樫の木が雨の後一陣の風をうけて滴をふりはらうように、振りとばしたものだ。きちんとした顔だち、怒るとすぐに燃え立つが、心の平安なときは静かで優しい非常に美しくて大きな暗青色の眼、濃い眉、感じのよい口もと—これらすべてが相まって彼の表情をきわめて気さくな誠実なものにしていた。髪は亜麻色であった》(1-76) という人であった。彼はほとんど字も書けない無学者であったが、天性の利発と爛眼と決断力はこれを補って余りあった。彼は本能的に善と悪、真実と嘘偽を立所に見抜いた。彼はまた非常にデリケートな人でもあり、相手の心と感情をそのまま感得するのであった。彼は自分の考えと感情をそのまま言葉と態度に表わした。何人も眼をごまかすことはできなかった。彼は自分の考えと感情を絶対的なものと見做していた。彼は家庭及び農奴の間では絶対者であった。ひとたび怒れば全家族がふるえ上り、一家は死の静寂と化した。²⁰ しかし彼はけっしてわからず屋ではなかった。良いものはまた率直に認めたし、賞揚しさえした。彼のことは人民—農民が古くから言い做わしたいいわゆる ナロードナヤ・ムードロスチ ことわざに満ちていた。風采も話しぶりもまことにそつがなく、農地の管理能力も充分に伺がわれ、何ひとつ欠点のなさそうな従妹の婿クロレソフと会見した後、彼はこう言う：「立派な若者だ。如才ないし、頭の回りも早い、しかしどうもわしは気がすすまない」(1-115)。果せるかな、クロレソフは結婚後しばらくして、放蕩無頼残忍非道なロシアの田舎の地主貴族になってしまったのであった。

気が弱く善良で両親の言いつけには絶対服従するような息子のアレクセイがソフィヤとどうしても結婚したいと言ったとき、ステパン・バグロフは言う（ステパン・バグロフはソフィヤの利発さとしっかりした気性は見抜いていて、彼女にはむしろ好感を抱いていたのである）：

「自分より利口な家内を持つのは災難だよ。夫の指揮官になるからな。それにお前はあの女にぞっこん惚れこんでいるから、はじめはきっと甘やかしてどうにもならなくしてしまうよ。だから息子よ、そんな恋愛などきれいさっぱり忘れることだ。これがわしのお前への父としての命令だ」(1-153～154)。

しかしこの結婚は息子の自殺騒ぎでついにバグロフの許すところになる。彼は息子の嫁ソフィヤに結婚式の翌日こんなふう言う：

「わしは心の中に何ごとであれ、留めておくことが嫌いでな。聞いてくれるなら、よろしいし、聞いてくれなんだから、それもお前さんの勝手だよ。あんたはわしの本当の娘ではないからな。ただわしの氣に入らんのはあんたが夫をアレクセイと呼ぶことだ。あれには父称というものがある。あんたはあれの母親でもないし、父親でもない。あんたは下男をアレクセイと呼び捨てにするだろうじゃないか。妻というものは夫に敬意を表さねばならん、そこで初めてほかの人も夫を敬うというもんだよ」(1-204)。

実にこの小説にはバグロフ家とその農民の生活、風習の克明な描写があり、(例えば、アレクセイとソフィヤの結婚式宴席の食卓、食事の描写は延々46版3ページにもわたっている)我々にとっては当時のロシアの社会事情、習俗を知る上にまことに興味深くまた貴重なものである。

まことに、この小説はエス・マシンスキー氏も言うごとく、「ロシアの社会小説発展のひとつの重要な段階であった」。

更にまた我々はクロレソフという人物において、このかつて有能で勤勉な地主—経営者から常識では考えられぬような残忍非道な地主—暴君に変わってしまった人物において、当時の草深い田舎の若い地主の一種底知れぬ、戦慄するよう憂愁を感じる。そしてステパン・バグロフ、クロレソフのみならずアクサーコフの描いた人物が後につづく十九世紀ロシア文学の人物像のある意味での原型になったものと思われるのである。²¹

最後にこの小説の終りの作者のことばを紹介しよう：

「さようなら、わが明るいまた暗い形象たちよ、わが善良なまた悪しき人たちよ、あるいは、より正しく言えば、明るい面も暗い面もある形象たち、善も悪ももつ人たちよ！あなたがたは偉大な英雄でもなければ名声ある人物でもない。静かに人に知られないであなたがたはこの世の舞台を通り過ぎて行った、しかもずっと以前に、ずっと昔にそこを去って行った。しかしあなたがたは人間であった。そしてあなたがたの外生活と内面生活は、われわれとわれわれの生活がいずれはわれわれの子孫にとって興味深く教訓的なものとなるだろうように、同じように詩情に満ち、同じように興味深く教訓的である。あなたがたは、すべての人がそうであるように、遠い遠い昔から人類によって演じられている偉大な全世界的演劇の登場人物であり、同じように良心的に自己の役割を演じた。そして同じようにそれは回想するに足るものである。文字と印刷の偉大な力によってあなたがたの子孫はあなたがたを知るに到った。彼らはあなたがたを共感を以て迎え、あなたがたが何時、どんなふうに生活し、どんな着物を着ていたにせよ、あなたがたの中に自らの同胞を認めた。さればあなたがたの思い出がいかなる偏った判断によっても、軽率なことばによってもけって汚されることなからんことを祈る！」(1-279)。

(未完)

注

1. Литературное наследство, 86, Ф. М. Достоевский, Новые материалы и исследования, «Наука», 1973, стр. 92.

なおここに回想記(воспоминания)とあるのは、エス・アクサーコフの作品がほとんど過去の回想という形で書かれているのみか、表題も『思い出』(Воспоминания)または『記録』、『雑筆』(Записки)となっているのが多いので、当時の人々はアクサーコフの作品を示すのに、単にアクサーコフの『思い出』とか『記録』、『雑筆』と言いつつにしていたのである。それほど彼の『釣魚雑筆』や『オレンブルグ県の銃猟家の記録』は有名であったし、この両者も釣魚、銃猟の回想という形をとっている。

ドストエフスキーがここで回想記というのもアクサーコフの作品全体を指すものと見るべきであろう。

なおまた現在刊行中のソ連版30巻本ドストエフスキー全集、第四巻、『死の家の記録』(Записки из Мертвого дома)の備考にはつぎの記述がある：「人間や事件の記録的に正確な記述と芸術的構想の結びつきは《死の家の》記録を一面から言えば、芸術的オーケル^{ドキュメンタル}と他面から言えば、回想と接するひとつのジャンルに入れることを可能にした」(チウルコフ)、「セミパラチンスク時代ドストエフスキーはア・イエ・ウランゲリの回想記によれば、とくに1840-50年代のロシア文学の報告文学形式に近い作品に興味を示していた。彼はエス・アクサーコフの『釣魚雑筆』と『オレンブルグ県の銃猟家の記録』、ツルゲーネフの『獵人日記』を読んで、彼は自分の作品に新しい形式を探していた。ヴェ・ベ・シクロフスキーは『死の家の記録』は《特殊な小説》であり、『記録的小説』であると考えている」(前掲書、290頁)。

2. クロポトキン、『ロシア文学・その理想と現実』(クロポトキン全集・第九巻)、新居格訳、春陽堂、昭和3年、238ページ。なおこの訳には《二人の保守派の作家》となっているが、引用に当っては原文(英文)通り《二人のスラヴ主義作家》とした。
3. Н. А. Добролюбов: «Деревенская жизнь помещика в старые годы», Собрание сочинений, т. II, «Худ. лит.», М.-Л., 1962, стр. 290~326. なおこの論文でとりあげられたのはアクサーコフの『孫バグロフの幼年時代』と『家族の記録』である。なおまたドブロリューボフは、それにもかかわらず、これらの作品の文学価値と記録的正確さを高く評価しているのである。
4. アクサーコフの研究がほとんど行われていないのは何もわが国だけではない。ソ連邦でもこの作家の研究(本格的)が行われはじめたのは漸く近年のことに過ぎない。その意味で1973年に刊行されたエス・マシンスキー氏の『エス・テー・アクサーコフ、生涯と作品』(С. Машинский, С. Т. АКСАКОВ, жизнь и творчество, Москва, «Художественная литература», 1973)はアクサーコフの生涯と作品を詳細に記述、分析した大著であって、この作家についてのソビエト時代に入ってから唯一のモノグラフィイと云うべく、極めて重要なものである。この書の序言でマシンスキー氏はアクサーコフ研究の欠如についてつぎのように言う：「S. T. アクサーコフは意義づけるに困難な

作家である。この困難は彼の研究の伝統がないことによって倍加される。彼の作品は長い間研究者の注意をひくことはなかった。多年の間彼については一冊の本も書かれなかった。彼の文学活動について多くの誤った観念が固定してしまったのも驚くに足りない。また彼の作品がかくも研究されず、彼の芸術家としての、審美的な立場の研究がかくも不十分なのはネクラソフの社会詩、ペリンスキーやチェルヌイシェフスキーの革命思想の世紀にアクサーコフの散文はあまりにも《平安な》、余りにも時代の思想的闊い、情熱的な真実の探求、時代の《呪われた》問題からかけ離れたものに見えたからなのかもしれない。研究者にとってはこの時代の精神的、政治生活をツルゲーネフの戦闘的小説、

チェルヌイシェフスキーの熱烈な社会評論、ネクラソフの社会詩によって再現することがずっと易しいのである。そして外見は社会の嵐や時代の思想的主要対立衝突には無関心に見えるアクサーコフの文章にこの時代の徴候を見分け、その雰囲気を感じ得ることは格段に難しいのだ。しかもこの外見はただ外見にすぎないのである。事実、時代の深層の脈搏、社会性および当時の現実の第一の悪—農奴制度に対する抗議の独自の表現がアクサーコフの作品には生きているのである。おだやかで叙事詩的な語り口、道理をわきまえた善良な地主たちの心の美しさの讃美—こういうことがあったとて研究者はアクサーコフの文章の反農奴制的傾向とその文章がこの時代のもっとも著しい、信ぴょう性の高い記念碑的作品の中に数えられるその価値を見出すことはできるのだし、また見出さなければならぬのである。最近まで《スラブ主義者アクサーコフ》はそれまでの《古来からのロシア体制》を主張し、農奴制度をも、愛すべき家父長的古代の現われのひとつとして擁護した、という伝説が生きていた。アクサーコフの作品に対するこの視点が、何かいったん永久に決ってしまった、論議や再考の余地のないものとして、もちつづけられて来たのである。このマシンスキー氏の指摘に関連してすでにエヌ・シチェドリオン Н. Щедрин (1826-1899) がその『遊地の旧習』(Пошехонская Старина) においてアクサーコフの作家態度につきつぎのように言っているのは注目すべきである：「故アクサーコフはその『家族の記録』の価値高き寄与によって疑いもなくロシア文学を豊富ならしめた。しかし、この作品には軽い牧歌的ニュアンスがしみわたっているとはいえ、その中に過去の擁護を認め得るのはただ近視眼の人たちだけである」(Н. Щедрин, Полн. собр. соч., т. XVII, Л., 1934, стр. 353)。

なお本稿でのアクサーコフに関する事実関係は主としてマシンスキー氏の前掲書によった。

5. 本稿で使用したアクサーコフの作品のテキストは4巻本の С. Т. АКСАКОВ, Собрание сочинений в четырех томах, «Худ. лит.», Москва, 1956 である。1-73 とあるのは、1はこの作品集の第1巻、-73 とあるのはその巻の第73ページであることを示す(以下これに準ずる)。
6. Охота を遊獵と訳すのは少し範囲が狭すぎると思うが、一語でその内容を示す適訳が思いつかないのでこのままにしておく。Охота とはここでは「興味をもって(趣味として)捕獲・採取に従事すること、またはその業」の意なのである。したがって、狩猟、魚釣り、昆虫採集、きのこ狩り等々、みな охота なのである。
7. この本の初版の題名はたんに『釣雑筆』(Записки об ужении)であったが、1854年 第2版のとき『釣魚雑筆』(Записки об ужении рыбы)となったのである。
8. С. Машинский, Примечания к Собранию сочинений С. Т. Аксакова, 4-620)。
9. アクサーコフの文体のもっとも著しい特徴のひとつはその簡明さ простота языка であろう。これは当時の文壇・批評家から高く評価され、いわば彼の文体の特質の定評となった。А. С. Хомяков はさらに《男らしい簡明さ》мужественная простота языка とまで賞讃している(「彼のことばの男らしい簡明さは日毎にいよいよ評価されるようになり、いよいよますますロシアの作家たちに影響を与えてゆくであろう」。А. С. Хомяков, Полное собрание сочинений, т. 3, ч. 2)。しかし《簡明なことば》とは対象にもっともマッチする、選びぬかれたしかも誰にもわかる標準的なことば、の謂であり、事実彼はツルゲーネフの『はたご屋』(Постоялый двор) に関し、ツルゲーネフにつきのように書き送っている：「私は地方語辞典がなければわからないような地方の、田舎のことばや表現を用いることは全くの誤りだと思います。地方色が出せるかもしれませんが、かかる言葉は全体の印象を損うのです、少くとも最初に読むときは」(1-62, С. М. Машинский, Вступительная статья к Собранию сочинений)。
10. А. С. Хомяков, Полное собрание сочинений, т. 3, ч. 2, стр. 370。
11. Заметки и размышления Нового Поэта по поводу русской журналистики, «Современник», том XLXI, Санктпетербург, 1854, стр. 130-131。
12. К. Г. Паустовский, «Великое племя рыболовов», Собрание сочинений в 8 томах, т. 8, стр. 250。
13. И. С. Тургенев, Полное собрание сочинений и писем, Сочинения, т. 5, Изд. Академии Наук СССР, М., -Л., стр. 397 и стр. 418。

14. А.С. Хомяков, Полное собрание сочинений, т. 3, ч. 2. стр. 371.
15. ミルスキー Мирский, Д. П. (1890-1939) がアクサーコフを《視覚的写真主義者》と評したことは有名である。
16. E. Cohen, The genre of the autobiographical account of childhood..., 1973, Xerox, University Microfilms, Ann Arbor, Michigan, U.S.A., p. 114.
17. アクサーコフは『家族の記録断章』(Отрывок из Семейной хроники, 1847) でつぎのように書いている:「私は真のロシア人, すなわち, 農民が《だれそれはじさままたはおじさまに生き写しだ, 顔も仕ぐさもそっくりだ》と言うのをよく聞いたものだ」(2-412). また Н. Пахомов が「この意味でエス・テ・アクサーコフをその本の《叙事詩的平安さ》でもって批難するのは, もちろん, 正しい. しかしこの作家が地主とその農民の関係を考察するに当って, 後者の側に立ち, 農奴制反動の暗黒時代にあって敢えて読者の前に過去の恐ろしい諸ページを開いて見せたこと, しかもそれを彼に近しい人々に起った事柄で示したことをも考慮しなければならない. そしてこのことがエス・テ・アクサーコフの社会的誠実さと市民的勇気を立証するものなのである」(Н. Пахомов, Абрамцево, «Московский рабочий», 1958, стр. 55) と言っているのは正しいと思う。
18. Орест Миллер (1833-1889) などはこれの代表的なものであろう (Орест Миллер, Русские писатели после Гоголя, том III, Издание т-ва М. О. Вольф, С.-П., М., 1887).
19. 例えば前掲の С. Машинский の С. Т. Аксаков, жизнь и творчество; Орест Миллер, Русские писатели после Гоголя; D. S. Mirsky, A History of Russian Literature 等。
20. Орест Миллер はステパン・バグロフをイワン雷帝に, 息子のアレクセイを雷帝の息子のフォードルに比している (前掲書 19頁)。
21. たとえば Орест Миллер はドストエフスキーの『悪霊』のスタヴローギンの原型をクロレソフに見ているし (前掲書, 24頁), D. S. Mirsky はステパン・バグロフの息子のアレクセイを《ロシア小説の中の通常の男性のもっとも著しい形象のひとつである》と言っている (D. S. Mirsky, A History of Russian Literature, Vintage Books, 1958, p. 188)。

(本稿は昭和 51 年度, 学校法人札幌大学研究助成費によるものである)。